

# 世の中の状況に応じた子供たちの防犯意識を高める 安全科の授業 ～もしもを考えて行動～

永松 希美

## はじめに

昨年度から新型コロナウイルスの感染拡大の影響を受け、子供たちを取り巻く環境も大きく変わりました。緊急事態宣言により学校は一斉休校になり、子供たちに深刻な影響を及ぼした。子供たちは、生活習慣が乱れ、友達に会えない寂しさや学習の遅れに不安を感じ、様々なストレスを抱えた。また、子供たちは友達と一緒に学んだり、遊んだりすることで、自分の感情や行動、コミュニケーション力、社会性スキルを学んでいく機会も奪われてしまった。この休校中に子供たちの防犯意識も緩んでしまったのではないかと考えている。

## 授業づくりの視点

本学級の児童の多くは、家から学校までの距離が遠いため、入学時より家庭で「知らない人にはついていかない。」というような話や約束をしっかりと交わしている。また、認定こども園や幼稚園、保育園などこれまでの成長過程の中で防犯について学習してきたこともあり、防犯意識も高い。しかし、以前まではマスクをしている人を不審に思ったり、警戒したりすることができていたが、今はマスク着用が一般化され、不審者に対する危機感さえ薄まってきている。また、緊急事態宣言が解除され、今まで外出を控えていた子供たちも放課後の遊びや習い事へ行くようになり、その帰りなどにおいて子供たちが犯罪の被害に巻き込まれることが懸念される。そのような時代の中、不審者の子供への声掛けや手口は年々巧妙になり、大人でも不審者かどうかの判

断も難しい時代になってきている。このような時代だからこそ「知らない人についていかない」ことを徹底するとともに、危険な目に遭わないための行動や危険を感じた時の回避方法を学び続けていくことが必要不可欠である。また、学び続けていくことによって子供たち自身が危険な目に遭う可能性は低くなるのではないかと考える。今回の学習を通して、子供自身の意識やそれに伴う行動が自分の身を守ることにつながるという意識の高まりに期待する。

## 指導計画

- ・不審者に狙われない対策を考える（1h）  
不審者は見た目で判断することは難しい。少しでも不審者に会わないような行動を考えることができる。
- ・不審者からの逃げ方を考える（2h）  
知らない人に声をかけられたときの対応方法や不審者と思われる人に出会った時の逃げ方について考えることができる。

## 授業の実態

### 第1時

- ・子供とつくる学びの手立て：データ、資料活用  
まず4枚の人物のイラストを見せ、不審者について考えた。ほとんどの子供が不審者は男性だと思っていたが、ある児童の「その時その時によって男の人だったり、女の人だったりするかもしれない。」という発言から、不審者は若い人かもしれないし、

年をとっている人かもしれないという気づきがありました。また、18歳以下を対象とした不審者情報のデータを提示することで中学生や高校生が狙われることが多いと思っていた児童は、小学生が過半数だと知り、驚いていた。しかし、小学生が狙われやすいということは、登下校の時間帯が一番危険なのではということに自分たちで気づくことができ、自分たちにとって身近な問題で、危険であることを認識することができた。また、この時に子供から「やっぱり一人で帰らず、友達と一緒に帰ったほうがいいな。」というつぶやきが出始めていた。

・子供とつくる学びの手立て：選択させることによって気づく危険性や安全性

3枚の歩いている子供のイラストを提示

- ①前を向いて歩いて帰っている子供
- ②途中で寄り道や立ち止まりながら帰っている子供
- ③下を向きながらとぼとぼ帰っている子供

この3枚のイラストを掲示し、どの歩き方が安全なのか、不審者に狙われにくいのかを考えさせた。子供たちはまず、②の子供は不審者から話しかけられやすいと指摘した。次に、③の子供は他の人と目を合わさないように歩いているので不審者に狙われにくいのではという多数の意見が出た。しかし、そこで「不安そうにしていると、声をかけたら連れていけそうと思われそう。」「お母さんが事故にあったから急いで病院へ一緒に行こうとか言われそう。」などの話し合いが活発になった。その中で、不審者はこんな誘い方をしてくるかもしれないというような不審者の誘い文句の話も出た。そして、最終「どの子も一人だから危ない。友達と一緒にだったらよかった。」と、複数で帰ることが大事だと子供たち自身で再認識することができた。

次に3枚の道路の写真の提示

- ①大きな空地に面している道路
- ②路上駐車されている車がたくさんある道路
- ③お店が立ち並んでいる道路

この3枚の写真の提示し、自分ならどの道路を歩いて家に帰るかを考えた。

子供たちは、すぐにお店が立ち並んでいる道路を選んだ。

その理由として…

- ・防犯ブザーの音に誰かが気づいてくれる。
  - ・人の目があるから不審者が現れにくい。
- ということを挙げた。

子供たちは、路上駐車をしている車に着目し、「路上駐車がたくさんあると見通しが悪く、影が多くて暗いため危険。その影に不審者がいるかもしれない。」と指摘した。また、大きな空地に面している道路においては、「見通しがいいから安全だ。」という子供の発言や「不審者が隠れるところがないから安全だ。」「見通しがいいから不審者がいてもすぐ気がつく。」といった意見が立て続けに出た。この状況で、子供たち自身が自ら危険を予知できていないことが明らかになった。今までの安全科の学習において「もしも」を合言葉に学習をすすめてきた。今回の学習においても「もし、どこからか不審者が来たら」と子供たちに投げかけた。すると、「見通しはいいけど、どこからか不審者が現れて防犯ブザーを鳴らしても、きっと誰にもその音は聞こえない。助けを求めても助けてくれる人がいない。」と、ある子供が発言した。この発言から、人通りの多いところの方が何かあった時に助けてくれる可能性が高いということに気づくことができた。

次に2枚の道路の写真の提示

- ①明るい時間帯の写真
- ②夕方の暗くなってきた時間帯の写真

この2枚の写真を提示し、時間における危険性について考えた。

子供たちは「暗い道は怖い。」「暗くなるとどこに不審者がいるかわからない。」「何かあっても夜は人通りが少ないから助けを求めることができない。」と発言。この学習展開のあたりから子供たちは、不審者がどこかにいるかもしれないという前提で考えることができた。



## 第2時

・子供とつくる学びの手立て：実際に身体を使って学ぶ（ロールプレイング）

知らない人から声をかけられた時の対応

- ・挨拶をされた場合
- ・道、場所を尋ねて来られた場合
- ・手を引かれそうになった場合

道を歩いていて「こんにちは」と挨拶をされた場合においては、子供たちからは「こんにちは」と挨拶して早歩きで通り過ぎるという意見が出た。ある児童が「こんにちは」と挨拶を返すとそのあとに何か話しかけられるかもしれないということに気づき、「お辞儀をして、さっとその場から離れる。」という意見も出た。

道や場所を尋ねて来られた場合においては、「地図を書いて教えてあげる。」という意見が出た。その意見から子供たちは「教えてあげている間に手を引っ張られるかもしれない。」というような危険性が高くなることに気がつき、「ごめんなさい、わか

りません。」「大人の人に聞いてください。」とその場から少しでも早く離れることが大切だと再認識できた。

手を引かれそうになった場合においては、子供たちは次のようなことを挙げた。「手を振り払う。」「防犯ブザーを鳴らす。」「大声で叫ぶ。」「助けを求める。」このことが次々に子供たちの発言からでてきた。

しかし、ある子供の発言で教室の空気は一変した。

児童A

「本当にそうってしまった場合は声が出ないと聞いたことがある。」

友達

「えっ!」「助けてとか言えるでしょ。」

児童A

「それが言えないらしい。おー!と低い声を出したらいいって聞いたことがあるよ。」

この発言をきっかけとなり、実際に声を出してみる学習につながった。

・子供とつくる学びの手立て：データ、資料活用  
学習の最後に警察庁が発行している子供防犯テキストを活用した。このテキストによって、これまでに自分たちが少しでも不審者による危険性を低くするために考えてきたことが、自分の身を自分で守ることにつながることをより深く理解できた。

## 第3時

・子供とつくる学びの手立て：実際に身体を使って学ぶ（ロールプレイング）

知らない人から声をかけられた時の対応

- ・相手との距離
- ・助けを求める声

まず、子供たちは人との距離について考えた。今まで学習してきたことをふまえて、子供たちは相手と距離をとっておかなければ、危険を感じた時に逃げるができないとすぐに気づくことができた。知らない人から挨拶をされたり、話しかけられた時は、相手との距離を十分に保つことが必要だと理解した子供たちは、相手から触れられない最低限の距離（新聞3枚程度）を全員で確認した。また、助けを求める時の大きな太くて低い声を出してみることにした。実際にやってみることで、子供たちは、「助けて」というよりも「おー」という低い声を出す方が出しやすいと感じることができた。また、日ごろから大きな声を出す練習をしておいた方がいいことにも気づくことができた。

あったのも事実である。防犯意識や危険回避能力を高めていくためには、日々の生活の中で定期的、継続的な指導が必要である。そのためには、各学年でその時代に応じた安全科の学習プログラムの開発、改善も重要となる。防犯に関しては、地域、保護者の連携も必要不可欠なため、学校から発信も必要である。



## おわりに

資料やデータを提示することで、不審者が自分たちの身近な問題や迫る危険だと感じことは、子供たちの防犯意識を高めていく第一歩だと感じた。また、さまざまな状況の道路の写真を提示し、その状況での危険予知の視点を持ってあらゆる危険性を考え、危機意識や危険回避を学習の中で意識させることができたのはこの学習の大きな成果である。しかしながら、授業の展開の中で「下校の時、強い友達と帰ったら大丈夫。」「走るのが速いから不審者に出会っても逃げるができる。」というような発言が

## 授業の中での子供の姿

「自分は不審者には出会わない。」

「会ったとしても大丈夫。」

危機感ゼロ

不審者は見た目では判断できない。

※データにより

小学生が狙われやすい

下校時間帯が危険



自分たちにとって身近な問題・迫る危険として考えることができた。



不審者に会う可能性を低くするため…

### 危険回避のための方法・手段

- ・一人での行動を減らす。
- ・暗い時間帯は出歩かない。
- ・人の目の多い場所を通る。
- ・助けを求めることができる場所が必要。

## 授業の中での子供の姿

「もし知らない人に声かけられたらどうしよう。」

「防犯ブザーを鳴らしたらいいよね。」

「大丈夫、逃げるができる。」

逃げるができる。

危機感ゼロ

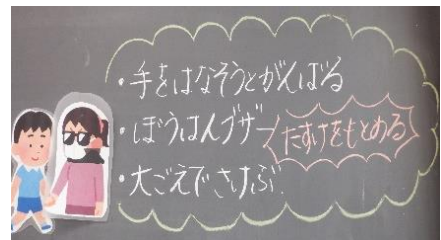


- ・周りをよく見て、怪しいなと思った人には近づかない。(相手との距離感)
- ・怪しいと思ったら、少しでも早くその場から離れる。
- ・防犯ブザーを鳴らす。
- ・「助けて」と言う。
- ・手を振り払う。

あれ!?

難しい!

大きな太くて低い声で「おー!」と声を出すほうが声は出やすい。



自分の身を守るために…

### 危険回避のための方法・手段

- ・すぐに逃げることでできる距離が必要。
- ・大きな声で助けを求める。
- ・手をブンブン払いのける。